

同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について

神戸大学 柴 真理子
 十文字女子大学 坪倉紀代子
 高知大学 山田 敦子
 神戸大学 米谷 淳

1. 研究の目的

本研究では、同じ舞踊運動を繰り返し踊ることと体感の関係について次の仮説を設定し、それを検証することが目的である。

【仮説】同じ舞踊運動を繰り返し踊ることによって、小間切れの動きの舞踊運動から、運動ゲシュタルトとしての舞踊運動へと踊りが変化し、その舞踊運動を自分の呼吸で踊れるようになっていくにつれて、舞踊運動自体の中に潜んでいる表現質に自分の内面が反映されたものとして、表現質が捉えられるようになるだろう。

2. 研究方法

2. 1. 体感評価実験

筆者らが異なる感情を内包することを想定して作成した3つの舞踊運動について、被験者に日にちを変えて5回踊り、その体感を18語から成るチェックリストから5語以内選択し、其々の体感の強さを4段階で評価することを求めた。又、毎回「3つの舞踊運動を踊ってみて気づいたこと」更に、5回の体感実験の終了後には「3つの舞踊運動を5回反復する過程で、自分自身が気づいた動きや体感の変化」を自由に記述することを求めた。

なお、第1回目には1つの舞踊運動のビデオ映像を数回みせた後に、各自での練習を約5分させた。練習中、舞踊運動を確認したい被験者には映像を見せた。その後一人づつ撮影を行い、その直後に体感を求めた。第2回目以降は、ビデオ映像を2回見せ、5分程度の練習とした。

◇被験者；神戸大学発達科学部学生13名

◇実験期日；2004年5月27日・6月3日・10日・17日・24日の5回

2. 2. 舞踊運動の変容の評価

◇評価者；山田敦子、坪倉紀代子

◇評価の時期；平成16年7月～9月

評価は、まず、独立して評価を行った。具体的には、評価者は一人の被験者の第1回目から第5回目までの映像をつなぎあわせ編集されたビデオテープをみ、そこにみられる舞踊運動の変化を自由記述でとらえた。その結果について2人の評価者と柴が協議し、

- ①舞踊運動の転換点1…運動が細切れの状態から流れがでてきた段階
- ②舞踊運動の転換点2…舞踊運動が自分のもの

になってきた段階

という2つの転換点を設定し、2名の評価者が改めて映像をみ、この2つの転換点をチェックした。

3. 結果と考察

3. 1. 舞踊指導者による舞踊運動の変化の評価

3. 1. 1. 二人の評価者の評価の傾向について

3. 1. 2. 転換点と回数の関係

3. 2. 舞踊運動の体感（感情語選択・強度4段階）の変容

3. 2. 1. 被験者全員の体感の平均的推移

3. 2. 2. 個人毎の体感の変容

3. 3. 舞踊運動とその体感の変化のプロセス

3. 4. まとめ

以上の結果と考察をまとめると

①舞踊運動の特質は、踊り手がその舞踊を完全に覚えておらず、細切れの状態でも踊ったとしても、体感することができる。

②速度が速い舞踊運動や弾む動きを有する舞踊運動を繰り返し踊った場合は、1回目からその舞踊運動の質を体感でき、5回を通じてその体感が一貫している。回を重ねるにつれて、スムーズに大きく踊れるようになり、およそ4回目には、大部分の被験者はその舞踊運動を自分のものとして踊れるようになる。

③速度の遅い縮小的な舞踊運動を繰り返し踊った場合、個人毎にまた、個人内で回数毎に1つの感情に定まらない。被験者はその日の体調やちょっとした動き方の違いによって体感が異なることを感じている。また回を重ねるにつれて、この舞踊運動の中で呼吸を感じたり、自分らしく表現していることを体感し、4、5回目には全員がこの舞踊運動を自分のものとして踊れるようになる。

④初心者が既成の舞踊運動を自らの舞踊運動として踊るためには、踊る（練習）回数を4～5回とすることが適当である。

⑤同じ舞踊運動を繰り返し踊るプロセスには、次の3つの段階がある。

- ・「動きを覚えることに必死で、体感を意識する余裕がない」段階
- ・「動きを覚えてスムーズに踊れるようになり、踊りながら自分の気持ちや気分を感じ取れるようになる」段階
- ・「自分のリズムで踊り、自分らしさを表現できる」段階

付記：本研究は、平成15年度～平成17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）（2）「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」（課題番号15300213）の一環である。